



# 日本植物分類学会 ニュースレター

\*\*\*\*\*

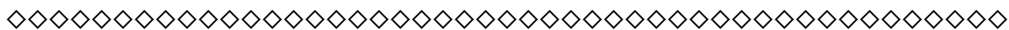
No. 52

Feb. 2014

## 今号のトピックス

第 13 回大会 (3/20-23 熊本大学) はまもなく開催です。  
公開シンポジウムの詳細が掲載されています。  
→ 11 ページ

メルボルン規約 (日本語版) 4 月刊行予定。  
3 月末まで特価で予約受付中。  
→ 16 ページ



## 目 次

### 諸報告

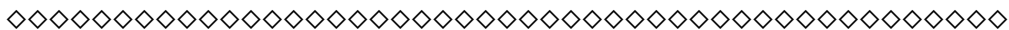
2014 年度第 13 回日本植物分類学会賞 (学会賞・奨励賞) 受賞者の決定	2
2013 年度日本植物分類学会論文賞の決定	3
2013 年度日本植物分類学会講演会の報告	4
植物分類学会講演会に参加して	5
日本植物分類学会第 12 回大会実施報告	7
2013 年度第 3 回メール評議員会議事抄録	10

### お知らせ

日本植物分類学会第 13 回大会公開シンポジウム 「阿蘇の草原フロラを探る～成立過程・大陸系遺存種・草原再生～」のご案内	11
評議員会開催のお知らせ	11
2014 年度総会のお知らせと審議事項	12
『国際菌類・藻類・植物命名規約 (メルボルン規約) [日本語版]』のご案内	16

### 寄稿

長野県環境保全研究所植物標本庫 (NAC) のご案内	17
植物研究会・同好会紹介 「樹形研究会」	18
会員消息	20



## 諸報告

### 2014 年度第 13 回日本植物分類学会賞 (学会賞・奨励賞) 受賞者の決定 学会賞選考委員会委員長 高宮 正之

本年度は合わせて 12 名の候補者が推薦されました。学会賞選考委員会において、ご本人あるいは推薦人から提出いただいた研究概要と業績リストなどの資料等をもとに協議いたしました。その結果、下記のように学会賞を 2 名の方に、奨励賞を 2 名の方に授与することに決定いたしました。

#### 学会賞

益村 聖 氏 (福岡県筑後市)

「手書きの絵による植物図鑑の制作」

邑田 仁 氏 (東京大学大学院理学系研究科附属植物園 教授)

「日華植物区系を主とする被子植物の分類学的研究」

#### 奨励賞

池田 啓 氏 (岡山大学 資源植物科学研究所 助教)

「日本産高山植物の系統地理：分布形成の歴史と地域適応への示唆」

奥山 雄大 氏 (国立科学博物館 筑波実験植物園 研究員)

「チャルメルソウ属をモデルとした日本固有植物群多様化機構の包括的研究」

(それぞれ 50 音順)

なお、授賞理由は以下の通りです。

#### 学会賞：

益村聖氏は、一般向けの素晴らしい図鑑を多数手掛けられています。既存の植物図鑑の多くは本州の植物が中心であり、九州の植物については図を伴わない解説のみの資料がほとんどでした。益村氏による『絵合わせ 九州の花図鑑』は、九州中北部の植物を調べる際のバイブルともいえる書として多くの方に利用されています。これまでに 4 巻出版された『原色九州の花・実図譜』は、細部まで正確にとことん描き込まれた大判の美しい図譜です。氏はまた、九州のイネ科やカヤツリグサ科研究への貢献も著しく、最近でも地方植物研究誌に精力的に総説を書かれています。APG にも、新雑種マンゴクドジョウツナギの記載論文を単名英文で発表されました。

邑田仁氏は、日本各地のほか、中国雲南省や台湾、ミャンマー等で現地調査を行い、日本の植物相と深く関連する日華植物区系の様々な植物について分類学的な研究を進めて来られました。これまでに扱われた研究対象は、テンナンショウ属および近縁属、サワギキョウ属、ツチトリモチ属、スズムシバナ属、ウマノスズクサ属、ツルリンドウ属、ホンゴウソウ科など多岐に渡ります。また、ミツマタやワカキノサクラのシュート構成の研究なども行われてきました。『原色牧野植物大図鑑』の編集、『日本のテンナンショウ』などの多くの図鑑類に関われ、一般への植物分類学啓蒙にも大きな貢献をなされました。日本植物分類学会では、2005 年から 2008 年までの二期、会長として会の発展に努められました。

このように、上記 2 名は、植物分類学および日本植物分類学会の発展に特に顕著な貢献があったと認められましたので、その深い功績を称え、日本植物分類学会賞を授与することといたしました。

## 奨励賞：

池田啓氏は、系統地理学を専門とされ、高山植物（特に周北極 - 高山植物）の進化に興味を持って研究を進められています。日本列島の高山植物では中部地方と北日本の個体が異なる系統に属することが分子系統解析から知られていましたが、池田氏は南北間の分化が集団レベルの分化として複数の高山植物において維持されていることを示されました。また、核遺伝子や集団遺伝学を取り入れた手法により、南北集団の分化が最終氷期直前の間氷期（最終間氷期）に由来することを提示されました。さらに、中部地方と北日本の個体間では、光受容体（フィトクロム；*PHYE*）が自然選択を受けて分化していることを明らかにし、地域間の分化には光環境への適応が関わることを示唆されました。最近では、日本固有種とその近縁とされる周北極植物の系統関係を明らかにすることに力を入れられています。APG への 1 編の論文発表および、日本植物分類学会大会での 7 件の発表（2009 年大会ポスター発表賞受賞）を行われ、2010 年大会発表賞審査員も務められました。

奥山雄大氏は、分子系統学、分子分類学、送粉生態学、遺伝学がご専門で、植物の多様な形質と生活史とをつなぎ、その進化史を解明することを研究テーマの中心としておられます。特に日本列島での多様化が著しいユキノシタ科チャルメルソウ属について一貫して研究を続けられ、その送粉様式と花形質の適応進化過程の解明、分子系統樹に見られる過去の種間交雑の痕跡の発見、生殖的隔離の進化パターンの解明と隠蔽種 2 種の発見、異質倍数体ゲノムの起源の解明等の成果をあげられました。また「世界で一番美しい花粉図鑑」等 3 冊の出版物の邦訳監修をされ、一般への植物学普及にも貢献されています。分類へ 1 編の論文発表があり、日本植物分類学会大会では、5 件の大会発表（2008 年大会ポスター発表賞受賞）を行い、2009 年大会発表賞審査員を務められました。

このように、上記 2 名は優れた研究業績をあげた将来有望な若手研究者であり、その功績を高く評価し、日本植物分類学会奨励賞を授与することといたしました。

## 2013 年度日本植物分類学会論文賞の決定

論文賞選考委員会委員長 田村 実

2013 年度日本植物分類学会論文賞は、2013 年に出版された『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』および『分類』に掲載された論文のうち、編集委員および論文賞選考委員から推薦された論文 8 編を論文賞選考委員会において審査し、次の 2 論文に決定しました。

Toyama, H., S. Tagane, P. Chhang, T. Kajisa, R. Ichihashi, V. Samreth, V. Ma, H. Sokh, A. Katayama, H. Itadani, M. Tateishi, Y. Tachiki, K. Mase, Y. Onoda, N. Mizoue, H. Tachida & T. Yahara. 2013. Inventory of the woody flora in permanent plots of Kampong Thom and Kampong Chhnang Provinces, Cambodia. *Acta Phytotax. Geobot.* 64 (2): 45-105.

選考理由：カンボジア低地の熱帯林内に設定されたパーマネントプロット内とその周辺において、樹木種の標本と DNA サンプルを採集し、DNA バーコード情報を最大限に活用して多数の種（69 科 325 種）を同定し、リスト化している。これは、カンボジアの樹木相研究に大きく貢献しただけでなく、今後の熱帯林のインベントリー研究の方法の手本になり得るもので、高く評価できる。

Fujii, N., K. Ueda, Y. Watano & T. Shimizu. 2013. Taxonomic revival of *Pedicularis japonica* from *P. chamissonis* (Orobanchaceae). Acta Phytotax. Geobot. 63 (2): 87-97.

選考理由：日本列島の高山植物の分子系統地理学的研究の中で見出されてきたヨツバシオガマ類の2つのDNAタイプの形態的な識別形質を、数多くのさく葉標本の形態形質と比較することによって再検討し、それらの情報を総合してヨツバシオガマ類の分類学的整理を行っている。分子系統地理学のデータを最終的な分類学的取扱いにまで反映させた論文であり、高く評価できる。

## 2013年度日本植物分類学会講演会の報告

講演会担当委員 岡崎 純子

2013年度の日本植物分類学会講演会が2013年12月21日(土)に大阪学院大学で開催されました。現在の植物分類学会が設立されてから13回目の講演会となります。今回は96名(学生22名)の参加者がありました。そのうち学会員は41名、一般の参加者は55名でした。ご講演頂いた演者とその演題は以下のとおりです。

加藤雅啓(国立科学博物館名誉研究員): 着生シダ植物の進化

西野貴子(大阪府立大学大学院理学系研究科): サワシロギク *Aster rugulosus* における湿地と蛇紋岩地帯への生態的適応

井鷲裕司(京都大学大学院農学研究科): 全個体ジェノタイプングによる絶滅危惧植物の保全

門田裕一(国立科学博物館): 日本産アザミ属の分類学的研究—解決できた問題、できなかった問題—

崎尾均(新潟大学農学部): 佐渡島の森林植生—気候・地質・人為の影響—

どの演者の発表もわかりやすさを心がけてお話ししてくださいましたので会員外の一般の方にも理解しやすい内容でした。着生という特殊なハビタットへの侵入進化の話や地道な形態測定研究から見てきた生態分化の話、ジェノタイプングからわかる希少種の遺伝的多様性の実態特に自生集団が1クローンだけから構成され、植物園などに系統保存された個体に多様性がみられ、保全すべき個体や集団はなにかを考えさせられた話、日本列島の中で種数の多いグループの1つであり同定に頭を悩ます種群が多いアザミの仲間の話、そして大型哺乳類の欠落のため今や残された林床性植物(食物も)の宝庫となっている佐渡島の自然の話など多岐にわたって、それぞれの方々の研究の進展をもとに話題提供して頂きました。参加者からは数多くの質問が飛びだし、活気の有る講演会でした。また、終了後に開催された懇親会には31名の参加者があり、懐かしい先生方やアマチュアの研究者の方々も多く参加して話が弾み、とても楽しいひとときを過ごすことができました。

今回の話題を提供して下さった5人の演者の方々、第一回学会賞を受賞された堀井雄治郎さんなど遠方から足をお運び下さった方々を含め参加者の皆様方、お忙しい中会場の提供と準備をして下さった大阪学院大の林一彦先生に感謝いたします。

植物分類学会講演会に参加して——  
根路 銘 恒次（大阪教育大学大学院）・小原  
昌之（大阪教育大学理科教育）・松本 美穂（大  
阪教育大学理科教育）

2013年度日本植物分類学会講演会が12月21日（土）に開催されました。今回の講演会場も前回と同様に大阪学院大学であり、スペースが広く、機器設備が整った立派な会場でした。僕たちを含め植物分野における学術的な内容に関して初心者と言ってもよい学生や一般の方々が参加するため、講演内容も専門的なことから一般向けの分かりやすいことまで多岐にわたっており、さらに普段は決して聞くことが出来ない貴重なお話の数々を専門家である先生の方々から伺うことが出来るので、少しでも多くのことを学び、自身の研究の参考にしたいと期待を膨らませていました。

加藤先生は着生シダ植物の進化について講演して下さいました。着生植物は真生着生植物、半着生植物に分けられ、さらに半着生植物は一次半着生植物、二次半着生植物に分けることができるということです。半着生植物の分類については、発芽段階の時点で着生しており、生長するにしたがって地表面へと進出していく種類のことを一次半着生と呼び、発芽段階の時点では地表面で生育しており、生長するにしたがって樹上へと進出していく種類のことを二次半着生と呼ぶと仰っていました。また、つる生植物が植物体の途中で切断してしまうと枯死してしまうのに対して、植物体の途中で切断しても生育が可能であるという点も半着生植物の特徴だということが分かりました。また加藤先生は、地生植物からつる生・着生植物への進化の方向性について2つの可能性を提示されていました。まず地生植物からつる生植物、半着生植物、着生植物へと段階的に進化したという可能性であり、続いて地生植物から着生植物へと段階を踏まずに一息に進化したという可能性です。段階進化の説を証明するためにシソ科の解析を行い形態的な特徴について説明されていました。まず発芽して根茎が樹木を登っていく際



図1. 着生シダの進化について熱く語る初代会長の高藤雅啓氏

に根茎を樹木内に侵入させ、葉を樹木外に出し付着根を発達させたことによって根を途中で切られても大丈夫な性質を備えたことに加え、根茎が空気中にさらされても乾燥に耐える性質を備えたことによって、つる生、（二次）半着生を経て着生植物へと進化したという考え方でした。次に段階を踏まずに一息に進化した説を証明するためにシシラン類を用いて解析されていました。系統樹を作成した結果、着生植物であるシシラン類と地生植物であるクジャクシダ属が系統的に近い関係を示し、且つシシラン類とクジャクシダ属の間に半着生、つる生の生活史を示す種が存在していないことから、シシラン類は段階を踏まずに一息に着生植物へと進化したという可能性を示唆されていました。今後の課題として、①生活形を正しく理解すること、②着生孢子・着生配偶体を調べること、③段階的着生化と一足飛び着生化の関係性に対して、④陸生化と着生化の関係性について、⑤着生植物と宿主・着生植物の相互関係についての以上5点を挙げていました。そのため、今後の研究発表が楽しみな講演内容でした。

西野先生は、サワシロギクにおける蛇紋岩地帯への生態的適応について講演して下さいました。サワシロギクの前に、近縁種のホソバナノギクの遺伝的多様性解析についての研究について説明して下さいました。その研究の結果は、ホソバナノギクの遺伝的多様性は川の上流下流など川の流れには関係が無く、地理的距離（直線距離）と関係があるという、興

味深いものでした。サワシロギクと、蛇紋岩地帯のシブカワシロギクとは、地下茎の有無や、生育地の特徴や分布など、多くの相違点があるとのことでした。また、その間には、中間型も存在しているとのことでした。また、サワシロギクとシブカワシロギクとを、様々な観点から比較して、その違いについて講演してくださいました。繁殖投資については、サワシロギクは40%、シブカワシロギクは70%投資しているとのことでした。しかし、差の30%は種のサイズに投資されているため、結実率については、ほとんど同じ値を示していました。また、サワシロギクの瘦果は散布能力が高いのに対し、シブカワシロギクの瘦果は実生定着率が高いという結果があったと、仰っていました。西野先生は、それらの違いを、生活史戦略について考えていらっしゃいました。サワシロギクは競争種が多く、冠毛の長い種で遠くへ飛ばし、新しい生育地で集団を形成するため。シブカワシロギクは数年単位の少ない崩落のため、近くへ確実に実生を定着させるためであるとの考えでした。また、中間型については、サワシロギクやシブカワシロギクに比べて、葉の傷や病害が多いということでした。生育地によって大きく変異が生じることがわかる、聞いていて楽しい講演でした。

井鷲先生は絶滅危惧植物I類の全個体ジェノタイプングを用いた保全について講演して下さいました。遺伝情報を増幅すると、共通している点・異なっている点をはっきりと示すことができ、個体に対して正確な評価を行うことができると仰っていました。その例として、スズカケソウの野生個体、植物園個体、小学校の個体とそれぞれ別のクローンであることが遺伝子型ではっきり見てとれた所が感動しました。また、目から鱗が落ちたのは、シモツクコウホネの盗掘です。インターネットで違法販売している個体をマイクロサテライトすることで、どの地域から盗掘してきたかがわかるという発表です。まさに、尻尾をつかむとはこのことだと驚愕しました。さらに井鷲先生は、固有種の多い小笠原諸島の植物において、ハザクラキブシの未知の存在をマイクロサテライトにより明らかにしました。芽生えの遺伝子型を読み込む



図2. 井鷲裕司氏の講演では美しい絶滅危惧種がたくさん紹介されました

ことで、確認している繁殖個体の遺伝子型にない塩基対を持つ個体が存在していることがわかり、正確な繁殖数を測ることができることがわかりました。さらに日本のみならず、視点は海外に向きました。例を挙げると、韓国では希少種のコガクウツギは遺伝的多様性がないことがマイクロサテライトによりわかり、反して日本では遺伝的多様性が高いため、各地に多く生息していることが遺伝子座により明らかになったそうです。また、ミヤマトベラは日本で個体数が多いにも関わらず、遺伝的多様性は低いため、環境の変化により、絶滅の恐れがある一方で、韓国では遺伝的多様性が高くなっているそうです。これらのことより、植物の保全は自国のみで留まらずに近隣諸国と協力していくことが不可欠であるとのことでした。人類だけでなく、植物もまた、生き残るために他国と協力する必要があることが改めて認識できました。

門田先生はアザミ属について紹介して下さいました。アザミ属は今まで多くの方が研究を行って来ました。アザミはトゲがあり、近寄りがたい植物であり大型のものでは2m以上にまで生長し、標本にもされにくいので研究が難しい植物だそうです。今回はその種の分類の仕方についてのお話をして下さいました。種の分け方は、頭花、茎葉、根生葉の形態で大きく分類されます。特に根生葉の有無が分類のキーとなる形質で花期に根生葉が残っているグループと残っていないグループに分けることが出来るとのことでした。日本列島には多くのア

ザミの種類が報告されています。その中で大きく分けて3つの分類群について紹介して下さいました。さらに広い分布域を持っている種で分類が難しいのですが、その形質や染色体を調べて分かった北海道のチシマアザミやエゾアザミ、東北のナンブアザミ、九州のツクシアザミの3種を詳しく分類分けし、新たな種の発見があったこともお話しされました。当たり前の種だと思われていてもまだまだ種のレベルで分からないことが沢山あるとおっしゃっていました。

崎尾先生は佐渡島の森林植生について講演して下さいました。佐渡島は沖縄本島に次ぐ大きな島で、スギの天然林が多い大佐渡山地、お米の産地である国中平野、二次林が多い小佐渡山地に分かれています。これらの地域は標高の違いにより、気候条件や植生が異なるとのことでした。佐渡島の気候は新潟と比べて、冬は暖かくて夏は涼しく、湿度は高いそうです。また冬になると、積雪量は標高200m以下では降っても溶けるそうですが、それより高い標高では3m積もることもあるとのことでした。積雪量も植生に影響を与える要因の1つであるように思いました。これらの気候が影響して、佐渡島には亜高山帯から暖温帯など様々な植物相が凝縮されています。ここで特徴的な点として、ハクサンシャクナゲなどの高標高に分布する種が、100m以下



図3. 盛況だった懇親会での集合写真

の低標高でも分布していることが挙げられました。その要因としては競争種が少ないことや、夏の涼しい気候のために低標高まで下りてきていると考えられるとのことでした。講演の中で、佐渡島の様々な自然の情景の写真を見せていただき、佐渡島に行って佐渡の自然とふれあいたいという気持ちになりました。

今回の講演内容も様々な分野から構成されており、非常に多くのことを学ぶことができました。また、どの演者の先生方も一般の方々や僕たち学生のために、発表内容を分かりやすいように工夫して下さいましたので、とても聞きやすい講演でした。数多くの貴重な御話をして下さった先生方、分かりやすい発表をして頂きありがとうございました。

## 日本植物分類学会第12回大会実施報告

第12回大会準備委員長 梶田 忠

日本植物分類学会第12回大会は、2013年3月14日(木)から17日(日)に、千葉大学西千葉キャンパス(千葉市)のけやき会館で開催されました。会期中の参加者総数は242人(うち一般173人[当日22人]、学生69人[当日11人])で、口頭発表54件(うち学生20件)とポスター発表55件(うち学生19件)の合計109件の研究発表が行われました。また、大会発表賞へのエントリー数は、口頭発表29件、ポスター発表22件でした。3月16日の夜に開かれた懇親会の参加者数は、171人(うち学生57人)で、スタッフ・アルバイトを含めると総数182人(うち学生65人)となりました。最終日の午後開催された一般公開シンポジウムでは、4名の演者の方に千葉県における生物多様性保全について講演していただき、一般からの参加も多数ありました。以上、多数の皆様にご参加頂きましたことについて、まずは心から、お礼申し上げます。皆様からお預かりした参加費は、下表の収支決算報告の通り、適切に使わせて頂きました。残金として生じた88,643円は、学会執行部とも協議の上、第13回大会に引き継がせて頂くことになりました。今大会に関する詳細な報告は、ウエ

ページ (<http://bean.bio.chiba-u.jp/jsps2013/>) の準備委員会掲示板等に掲載しておりますので、どうぞご覧下さい。

### 第 12 回大会収支決算報告 (簡易版)

収入		支出	
学会からの補助	100,000	会場費	150,600
事前受付	1,214,500	要旨集・パンフレット印刷	141,120
当日受付	236,500	懇親会関係	648,425
書籍展示	10,000	アルバイト等謝金	430,900
		雑費・2重払い返金等	101,312
		第 13 回大会への引継ぎ	88,643
計	1,561,000		1,561,000

本大会は、綿野・朝川・梶田の 3 名のスタッフで運営しました。この 3 名で分類学会関係の大会を運営するのは、2004 年に佐倉で開かれた国際シンポジウムにつづき 2 度目です。今回は千葉大学けやき会館という、いわばホームでの開催でしたので、運営においてもやや心の余裕がありました。

大会の準備は、大阪での第 11 回大会の終了後すぐに開始しましたが、まず始めに行ったのが、大会運営のための方針の相談です。スタッフ 3 名で話し合った結果、

1. 参加費を引き下げるために受付業務を自動化・簡素化する
2. 発表数を増やすために、締め切りを例年よりも 2 週間遅らせる
3. 懇親会への学生の参加を促すため、学生懇親会費費をできる限り下げる

という 3 つの運営方針が決まりました。これらの方針をニュースレターおよび大会ホームページに皆様にアナウンスし、参加者の皆様にご理解とご協力を求めました。この 3 方針に沿って、また、参加者の皆様にできるだけご満足頂けるように心がけて、大会運営の準備を進めました。以下、本大会の特徴となった事項のいくつかを報告します。

### 学生の皆様、懇親会へのご参加、ありがとうございました!

植物分類学会の大会では、学生の大会参加者数に比べて、懇親会への参加者数が少ないという印象がありました。過去のデータを調べたところ、ここ数年、学生の懇親会参加者数は大会への参加者数の 6-7 割に留まっているようでした。しかし、我々自身が学生の頃から、懇親会は、普段は直接話すことのできない研究者の皆様とお会いして、研究の醍醐味や苦労をお聞きしたり、時には、共同研究の機会を広げることできる、大切な場所です。そこで、大会への学生参加者のうち 8 割以上に懇親会に参加して頂くことを目指して、懇親会費の値下げと、ニュースレターやウェブページでのアナウンスを行いました。懇親会に多くの若者に参加して欲しいというメッセージには、皆様のご賛同を得ることができ、学生参加者のうち懇親会参加者率は 86.4% (スタッフ・アルバイトを含めると 87.8%) と、目標を大きく超えることができました。懇親会参加者のうち学生の割合は 33% で、3 人に 1 人は学生という、若者の姿が目立つ懇親会となりました。懇親会は通常よりも遅い時間に開始したのですが、大変盛会で、我々スタッフも大いに楽しませて頂きました。お料理は 180 名分を準備していたのですが、終了時にはきれいに無くなっており、食品ロスを抑えることができました。また、懇親会に華を添えて下さったのが、有志の皆様から頂いたお酒などの差し入れです。お心づかい下さった皆様には大変感謝しております。



## ウェブページからの参加登録と大会ホームページの充実

従来の大会では、電子メールと郵送による参加・発表登録が行われていましたが、今回は、ウェブサイトから登録ができるようにしました。ウェブページからの登録システムを使う主な利点は、

- ・データの集計作業が自動化できる
- ・プログラムと要旨集の元データの出力が容易になる

の2点です。このシステムを導入したおかげで、準備にかかる時間とコストを大幅に削減することができました。もちろん、インターネットへのアクセスが容易で無い方や、扱いに不慣れな方からは、電話や書面での申し込みもお受けしました。

登録システムについては、幸い、2004年の国際シンポジウムの際に作成したものがありましたので、それを日本語化し、12月から登録受付を開始しました。受付開始後すぐに、ウェブサーバがファンの故障により停止したり、登録システムにバグが見つかったりしましたが、皆様のご協力のおかげで、大した混乱も無く、参加・発表登録を終えることができました。このシステムは、我々の研究室で維持している独自サーバに、ウェブ及びデータベースサーバを構築して作られていますが、学会が契約しているレンタルサーバへの移植も可能ですので、今後も役立てて頂ければと思います。

また、今大会では、国立情報学研究所が開発して無料配付している NetCommons を用いて、大会ウェブページを充実させました。NetCommons はコンテンツマネジメントシステム (CMS) の一つで、ウェブサーバへのファイル転送と HTML に関する専門知識、専門のソフトウェア等が無くても、ブラウザからの操作だけで簡単に、ウェブサイトの構築と維持・管理ができるシステムです。このシステムを導入したおかげで、準備委員会から参加者への皆様への情報伝達を、きめ細かく行うことができました。なお、NetCommons も、学会が契約しているレンタルサーバへの導入が可能ですので、次回以降の大会でお使いいただけるかもしれません。

## 口頭発表・ポスター発表・プログラム編成

今大会の総発表数は 109 件で、過去 5 年の平均 94.2 件より 15 件程度多くなりました。特徴的だったのは、発表数の増加のほとんどが、口頭発表数の増加という形で現れた点です (過去 5 年の平均で 40 件のところ、今大会は 54 件)。実は、登録受け付け終了時には、口頭発表の申し込みがあと 2 件あったのですが、会期内に収めることが難しかったので、ポスター発表に変更していただきました。口頭発表 54 件を 3 日間の日程に収めるのは大変難しく、結局、発表初日は午前 9:00 から 2 日目と 3 日目は午前 8:30 から、口頭発表を開始しました。遠方からおいでになった皆様には、早朝からのご参加、有難うございました。

多くの申し込みを頂いたおかげで、今大会の口頭発表プログラムは、大変充実していたと思います。特に、口頭発表での大会発表賞エントリー数が 29 件と非常に多く、若手研究者の優れた口頭発表をたくさん聞くことができました。一方で、29 件のエントリー発表は 1 日のプログラムには収まりきらなかったため、審査員の皆様には、初日の早朝から 2 日目午前まで発表を聞いて頂き、2 日目のお昼休みに審査結果を出して頂くという、忙しいスケジュールとなってしまいました。

ポスター発表数の 55 件はほぼ平年並みで、会場はやや狭いながらも、それほどの窮屈さは感じずに、ポスター発表をお楽しみいただけたと思います。ポスターセッションは初日に 2 時間、2 日目に 1 時間をとりました。2 日目のプログラムは、「一般発表、授賞記念講演、学会賞授与式、総会、ポスターセッション、懇親会」という順番で行ったのですが、これは、人の流れを重視して、例年とはやや順番を変えたものでした。総会に参加されなかった方の多くは、懇親会の時間ま

でポスター発表をご覧になられることができ、この順番は概ね好評だったように思います。

## その他

発表に使ったポスターボードは千葉大学高大連携企画室から無料でお借りしました。また、千葉大学の学術情報基盤センターでは、学内無線 LAN のゲストアカウントを参加者の人数分、発行して頂きました。この場をお借りして、お礼申し上げます。最後になりますが、本大会の実施において、大会運営にご協力下さった全ての皆様と、参加して下さいました全ての皆様に、心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

## 2013 年度第 3 回メール評議員会議事抄録

庶務幹事 志賀 隆

2014 年 1 月 18 日～1 月 31 日に 2013 年度第 3 回メール評議員会が開催されましたので、議事抄録を報告します。この会議は事業報告案と事業計画案、会計決算案と予算案を評議員の方々に審議していただき、総会までの会務・会計執行の指針を得るためのものです。なお、本ニューズレターでお知らせする 3 月 20 日の評議員会と 22 日の総会に提案される議案には、その後の推移を反映した最低限の修正が加えられている箇所がありますことをご了承ください。

開催日時：2014 年 1 月 18 日～2014 年 1 月 31 日

開催方法：電子メール等の媒体を用いた会議

参加者：評議員全員

### 議長選出

慣例にしたがい角野康郎氏を議長とすることに反対はなかった。

### 審議事項

- 第 1 号議案 2013 年度事業報告案
- 第 2 号議案 2013 年度決算案
- 第 3 号議案 2014 年度事業計画案
- 第 4 号議案 2014 年度予算案
- 第 5 号議案 刊行物の在庫処理について

### 審議結果

- 第 1 号議案は、賛成 11 票、反対 0 票、白票 2 票で承認された。
  - 第 2 号議案は、賛成 11 票、反対 0 票、白票 2 票で承認された。
  - 第 3 号議案は、賛成 11 票、反対 0 票、白票 2 票で承認された。
  - 第 4 号議案は、賛成 11 票、反対 0 票、白票 2 票で承認された。
  - 第 5 号議案は、賛成 11 票、反対 0 票、白票 2 票で承認された。
- 議事録署名人として仲田崇志氏と西田佐知子氏が選出された。

## お知らせ

日本植物分類学会第13回大会公開シンポジウム  
「阿蘇の草原フロアを探る～成立過程・大陸系遺存種・草原再生～」のご案内  
第13回大会会長 高宮 正之

【日時】2014年3月23日(日) 13:00～16:00

【場所】熊本大学黒髪南キャンパス工学部2号館(熊本市中心区黒髪2-39-1)

【料金】無料

【内容】阿蘇カルデラとその周辺域にはわが国最大級の草原が広がっており、いわゆる満鮮要素と呼ばれる大陸系遺存植物が多く見られる興味深い場所です。本シンポでは、阿蘇をキーワードとして様々な研究や活動をされている方々にご講演いただき、阿蘇の草原フロアの特徴を、植物分類学や植物地理学、古植生学的な角度から改めて見直してみたいと思います。一方、阿蘇では近年人間活動の変化により草原面積が激減し、多くの草原植物が絶滅危惧植物としてリストアップされています。そうした中で、草原再生の活動を進めてこられた方にもご講演いただき、現状と問題点について話題をご提供して頂きます。本シンポを通して、残された課題や問題点を整理し、今後の研究に向けた一助となればと期待しています。会員・非会員を問わず、大会参加者以外も無料で来聴できますので、皆さまのご参加をお待ちしております。

### 【講演者と演題】

1. 南谷志忠(宮崎植物研究会)「阿蘇地域における植物相の特徴」
  2. 長谷義隆(御所浦白亜紀資料館)「阿蘇の最終氷期以降の植生変遷と草原の成立要因」
  3. 仲川邦広(東農大・院・農)・佐藤千芳(熊本植物研)・新井玲奈(北大・院・農)・宮本太(東農大・院・農)・三井裕樹(東農大・院・農)「なぜ阿蘇に?いつ阿蘇に? 半自然草原に生きる遺存植物の歴史を探る—アソタカラコウ(キク科)を例に—」
  4. 瀬井純雄(阿蘇花野協会)・高沢智嗣(熊本大・院・自然科学)・藤井紀行(熊本大・院・自然科学)「阿蘇における草原植物の現状と草原再生—スギ伐採林跡地からの草原再生—」
- なお、本シンポは、熊本大学理学部共催、熊本大学後援にて行われます。

問い合わせ: 日本植物分類学会第13回大会準備委員会 大会実行委員長 副島 顕子  
Tel & Fax: 096-342-3448, E-mail: bunrui@sci.kumamoto-u.ac.jp

## 評議員会開催のお知らせ

庶務幹事 志賀 隆

日本植物分類学会第13回大会(於:熊本大学)の開催に合わせ、下記の通り評議員会を開催します。評議員、幹事会等の関係各位のご出席をお願いいたします。

日時: 2014年3月20日(木) 16:00～19:00

会場: 熊本大学黒髪北キャンパス くすのき会館レセプションルーム(熊本市中心区黒髪2-40-1)

詳細は関係各位におって連絡いたします。審議事項についてご意見やご希望がございましたら、評議員、会長、幹事、委員長のいずれかにお伝えください。

## 2014 年度総会のお知らせと審議事項

庶務幹事 志賀 隆

3月22日に開催される総会において、以下の議案が審議されます。会員各位の参加をお願いします。

1. 2013 年度事業報告案 (12 ページ参照)
2. 2013 年度決算報告案 (14 ページ参照)
3. 2014 年度事業計画案 (13 ページ参照)
4. 2014 年度予算案 (15 ページ参照)

## 2013 年度事業報告 (案)

## (1) 集会等の開催

## ・ 学術集会, 講演会, 研修会

年次学術集会(日本植物分類学会第12回大会:3月14~17日千葉大学)を開催した(ニュースレター No. 49 で報告)。

2013 年度野外研修会を広島県八幡高原にて開催した(8月31日~9月2日)(ニュースレター No. 51 で報告)。

2013 年度講演会を大阪学院大学で開催した(12月21日)(ニュースレター本号で報告)。

## ・ 総会, 評議員会

年次総会を千葉大学で開催した(3月16日)(ニュースレター No. 49 で報告)。

評議員会を1回(ニュースレター No. 49 で報告), メール評議員会を3回(第1回はニュースレター No. 48 にて, 第2回は No. 50 にて報告, および第3回は本号にて報告)開催した。

## (2) 出版物の刊行

## ・ 学会誌の発行

英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』第63巻2, 3号, 第64巻1~3号(計5冊)を発行した。

和文誌『分類[日本植物分類学会誌]』第13巻1~2号(計2冊)を発行した。

## ・ ニュースレター

『日本植物分類学会ニュースレター』48~51号(計4冊)を発行した。

## (3) 委員会活動

## ・ 絶滅危惧植物専門第一委員会(藤井委員長)

## ・ 絶滅危惧植物専門第二委員会(樋口委員長)

## ・ 植物データベース専門委員会(伊藤委員長)

## ・ 学会賞選考委員会(ニュースレター本号で報告)(高宮委員長)

## ・ 論文賞選考委員会(ニュースレター本号で報告)(田村委員長)

## ・ 大会発表賞選考委員会

## ・ 国際命名規約(メルボルン規約)邦訳委員会(大橋委員長)(ニュースレター本号で報告)

## ・ 普及のための教育委員会(仮称)の編成準備として幹事会での意見交換を行った。

## (4) 表彰

- ・日本植物分類学会賞（学会賞・奨励賞）の授与を行った（ニュースレター No. 48 で報告）。
- ・日本植物分類学会論文賞の授与を行った（ニュースレター No. 48 で報告）。
- ・日本植物分類学会大会発表賞の授与を行った（ニュースレター No. 49 で報告）。

## (5) 国内外の関係学術団体との連携・協力

- ・学会連合等への参加・連携を行った：日本学術会議，植物分類学関連学会連絡会，自然史学会連合，日本分類学会連合。
- ・日本・韓国・中国合同国際シンポジウム「East Asian Botany Symposium 2013」の共同開催を行った。
- ・牧野富太郎博士生誕 150 年記念展『植物学者・牧野富太郎の足跡と今』（6 月 16 日～9 月 23 日：高知県立牧野植物園，2012 年 12 月 22 日～2013 年 3 月 17 日：国立科学博物館本館）の後援を行った（ニュースレター No. 49 で報告）。

## (6) その他

- ・学会刊行物のバックナンバー等を販売した。
- ・植物分類学関連情報（学術集会，研究動向，出版物，公募）を収集し，ニュースレター，ホームページ等で提供した。
- ・学会刊行物の国内外の研究機関への寄贈と交換を行った。
- ・日本・韓国・中国合同国際シンポジウム「East Asian Botany Symposium 2013」への参加者のうち，若手の会員に旅費支援を行った。
- ・植物分類学研究マニュアルの刊行計画を立て，準備のできた原稿について和文誌「分類」への先行掲載を 13 巻 2 号から開始した（ニュースレター No. 50 で報告）。
- ・絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）の改正に関する意見書を石原伸晃環境大臣宛てに提出した（ニュースレター No. 49 で報告）。
- ・印西市「千葉ニュータウン 21 住区開発用地（通称，そうふけっぱら）」の生物多様性保全を求める意見書を関連自治体および都市再生機構に提出した（ニュースレター No. 50 で報告）。

[2013 年度決算（案）は次ページに掲載]

**2014 年度事業計画（案）**

## (1) 集会等の開催

- ・学術集会，講演会，研修会
  - 年次学術集会（日本植物分類学会第 13 回大会：3 月 20～23 日熊本大学黒髪南キャンパス）を開催する。
  - 日本・韓国・中国合同国際シンポジウム「East Asian Botany Symposium 2014」（日程，場所ともに未定）を開催する。
  - 2014 年度講演会（12 月を予定，大阪学院大学）を開催する。
  - 2014 年度野外研修会（7 月を予定，青森県八甲田山周辺）を開催する。
- ・総会，評議員会
  - 年次総会を年次学術集会に合わせて開催する（3 月 22 日）。
  - 評議員会を開催する（3 月 20 日）。

[次ページ下に続く]

## 2013年度決算(案) (2013.12.31現在)

収入の部	単価	数	予算	決算	予算との差異
会費					
通常(一般)	5000	735	3675000	3695740	△ 20740
通常(学生/海外)	3000	92	276000	180000	96000
団体会員	8000	24	192000	200000	△ 8000
バックナンバー販売			100000	109500	△ 9500
命名規約販売			20000	7500	12500
利息			1000	974	26
雑収入			50000	149660	△ 99660 注1
小計			4314000	4343374	△ 29374

支出の部	単価	数	予算	決算	予算との差異
大会補助費			100000	100000	0
講演会補助費			50000	53000	△ 3000
出版物印刷費					
APG vol. 63(2,3), 64(1,2,3)	650000	5	3250000	3507596	△ 257596 注2
分類vol. 13(1,2)	550000	2	1100000	1295910	△ 195910 注2
ニュースレターNo. 48-51	55000	4	220000	196950	23050
英文校閲費			50000	50000	0
出版物送料					
APG送料	80	5500	440000	392494	47506 注3
和文誌送料	80	2000	160000	68882	91118 注3
NL送料	60	4000	240000	106934	133066 注3
会議費			50000	11674	38326
学会賞表彰経費			60000	85600	△ 25600 注4
自然史学会連合負担金			20000	20000	0
分類学会連合負担金			10000	10000	0
事務局管理費					
消耗品費			50000	36402	13598
交通費			100000	1140	98860
アルバイト賃金			470000	368486	101514 注5
封筒等印刷費			250000	215145	34855
通信費(小包手数料を含む)			70000	65970	4030
手数料・その他			30000	28560	1440
自動振替集金代行基本料			3150	3150	0
自動振替口座確認手数料	126	170	21420	20013	1407
自動振替新規手数料			0	0	0
レンタルサーバー使用料			26000	25200	800
国際シンポジウム積立金			300000	300000	0
予備費			100000	21500	78500 注6
合計			7170570	6984606	185964

単年度収支	△ 2856570	△ 2641232	△ 215338
APG63(2,3)を除いた単年度収支	△ 1380570		
前年度からの繰越金	11294998	11294998	0
次年度への繰越金	8438428	8653766	△ 215338

注1:著作権使用料など

注2:カラー印刷およびページ増のため

注3:複数誌の同時発送により節約

注4:賞状台紙を増刷したため

注5:会計作業補助、年次大会における会計作業補助、編集作業補助を含む

注6:学会賞受賞者の大会参加補助など

## 特別会計 2013年度決算

収入	2012年度予算	2013年度決算	予算との差異
前年度繰越金	2846011	2846011	0
国際シンポジウム積立金	300000	300000	0
寄付	0	0	0
利息	0	0	0
合計	3146011	3146011	0

支出	2012年度予算	2013年度決算	予算との差異
命名規約和訳出版	1800000	182630	△ 1617370 注1
国際シンポジウム準備金	0	0	0
日中韓シンポジウム若手派遣	350000	124260	△ 225740 注2
次年度への繰越金	996011	2839121	1843110
合計	3146011	3146011	0

注1:メルボルン規約原文出版の遅れのため会議費のみ

注2:2人を派遣した

## (2) 出版物の刊行

## ・学会誌の発行

英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』第65巻1～3号(計3冊)を発行する。

和文誌『分類[日本植物分類学会誌]』第14巻1～2号(計2冊)を発行する。

## ・ニュースレター

『日本植物分類学会ニュースレター』52～55号(計4冊)を発行する。

[次ページ下に続く]

## 2014年度予算(案)

収入の部	単価	数	予算	前年度予算との差異
会費				
通常(一般)	5000	753	3765000	90000 注1
通常(学生/海外)	3000	97	291000	15000 注1
団体会員	8000	22	176000	△ 16000 注1
バックナンバー販売			100000	0
命名規約販売			20000	0
利息			1000	0
雑収入			50000	0
合計			4403000	89000

支出の部	単価	数	予算	前年度予算との差異
大会補助費			100000	0
講演会補助費			70000	20000 注2
出版物印刷費				
APG vol. 65 (1, 2, 3)	720000	3	2160000	△ 1090000 注3
分類vol. 14 (1, 2)	750000	2	1500000	400000 注4
ニュースレターNo. 52-55	55000	4	220000	0
英文校閲費			50000	0
出版物送料				
APG送料	80	3300	264000	△ 176000 注5
和文誌送料	80	2000	160000	0
N.送料	60	4000	240000	0
会議費			50000	0
学会賞表彰経費			60000	0
自然史学会連合負担金			20000	0
分類学会連合分担金			10000	0
事務局管理費				
消耗品費			50000	0
交通費			100000	0
アルバイト賃金			470000	0 注6
封筒等印刷費			0	△ 250000 注7
通信費(小包手数料を含む)			70000	0
手数料・その他			30000	0
自動振替集金代行基本料			3150	0
自動振替口座確認手数料	126	170	21420	0
自動振替新規手数料			0	0
レンタルサーバー使用料			26000	0 注8
国際シンポジウム積立金			300000	0 注8
予備費			150000	50000 注9
合計			6124570	△ 1046000

単年度収支	△ 1721570
前年度からの繰越金	8653766
次年度への繰越金	6932196

注1: 会員数見直しによる(新入会、名譽会員増、退会・除名・逝去など)

注2: 前年度までの実績に応じて変更

注3: カラー印刷増のため単価は上がるが、昨年度の5号刊行から通常通り3号刊行となるため

注4: 前年度の実績に基づく(分類学マニユアル掲載によるページ増のため)

注5: 昨年度の5号刊行から通常通り3号刊行となるため

注6: 編集業務補助を増加した他、前年度までの実績に基づく

注7: 執行部変更を伴わないため

注8: 2015・2016年度も30万円を計上予定

注9: 会長・評議員の選挙費用および受賞者招へい経費を含む

## 特別会計 2014年度予算(案)

収入	2014年度予算	前年度予算との差異
前年度繰越金	2839121	△ 6890
国際シンポジウム積立金	300000	0 注1
寄付	0	0
利息	0	0
合計	3139121	△ 6890

支出	2014年度予算	前年度予算との差異
命名規約和訳出版	1889121	89121 注2
国際シンポジウム準備金	900000	900000 注3
日中韓シンポジウム若手派遣	100000	△ 250000 注4
次年度への繰越金	250000	△ 746011
合計	3139121	△ 6890

注1: 2012年度より一般会計から移管。2014年に90万円支出予定。

注2: 出版にともなう経費(会議費含む)

注3: 日本での開催に係る準備金

注4: 日本での開催なので減額

・『国際藻類・菌類・植物命名規約(メルボルン規約)2012 [日本語版]』を発行する。

## (3) 委員会活動

以下の委員会を組織し、目的に沿って活動する。

- ・絶滅危惧植物専門第一委員会

- ・絶滅危惧植物専門第二委員会
- ・植物データベース専門委員会
- ・学会賞選考委員会
- ・大会発表賞選考委員会
- ・論文賞選考委員会
- ・国際命名規約（メルボルン規約）邦訳委員会
- ・ABS 問題検討委員会

#### (4) 表彰

- ・日本植物分類学会賞（学会賞・奨励賞）の授与を行う。
- ・日本植物分類学会大会発表賞の授与を行う。
- ・日本植物分類学会論文賞の授与を行う。

#### (5) 国内外の関係学術団体との連携・協力

- ・国内学会連合等への参加・連携を行う：日本学術会議，自然史学会連合，日本分類学会連合など。
- ・The Korean Society of Plant Taxonomists (KSPT)，および Taxonomy and Evolution Division, the Botanical Society of China (BSC) と連携する。

#### (6) その他

- ・学会刊行物のバックナンバー等の販売と整理を行う。
- ・植物分類学関連情報（学術集会，研究動向，出版物，公募）を収集し，ニュースレター，ホームページ等で提供する。
- ・学会刊行物の国内外の研究機関への寄贈と交換を行う。
- ・植物分類学研究マニュアルの作製と和文誌『分類』への原稿掲載を進める。
- ・普及教育に関する委員会の設置に関連して，会長が諮問するワーキンググループを設置する。
- ・会長・評議員の選挙を行う。

[2014 年度予算（案）は前ページに掲載]

### 『国際菌類・藻類・植物命名規約（メルボルン規約）[日本語版]』のご案内 国際命名規約邦訳委員会

植物の学名に関する国際的な取り決めである国際命名規約の最新版 *International Code of Nomenclature for Algae, Fungi, and Plants (Melbourne Code) : adopted by the Eighteenth International Botanical Congress, Melbourne, Australia, July 2011* (McNeill et al. 2012 [eds.]) の日本語版です。国際植物命名規約はほぼ 6 年ごとに改訂され，規約は過去に遡って適用されるため，学名の取扱いは常に最新の規約に従う必要があります。今回の改訂では特に大きな変更があり，規約の全体構成も見直されています。翻訳は日本植物分類学会国際命名規約邦訳委員会（委員長：大橋 広好 東北大学名誉教授）が担当し，国際植物分類学会から日本語版として承認されています。

日本語版仕様： B5 判 上製本（2014 年 4 月刊行予定）



頒布価格： 1部 2,800円（税・送料込み，別途郵便払込手数料がかかります）

※予約特価： 2014年3月31日までに申し込まれた場合に限り，1部 2,300円（税・送料・郵便払込手数料込み）。

申込方法： 次の必要事項をご記入の上，Faxまたはe-mailで申し込んでください。 1. 氏名， 2. 送付先郵便番号， 3. 送付先住所， 4. 電話番号， 5. FAX番号， 6. e-mailアドレス， 7. 必要部数， 8. 公費支払をご希望の方は必要書類と通数，宛先等の情報（例：見積書，請求書，納品書各1通）。

（申込先および問合せ先）： 北隆館 編集部 角谷 Tel.03-5449-4591 Fax.03-5449-4950  
E-mail : hk-ns2@hokuryukan-ns.co.jp

支払方法： 2014年3月31日までお申し込みの予約分につきましては，日本語版に郵便払込用紙を同封して発送しますので，ご送金ください。

2014年4月1日以降のお申し込み分からは料金先払いとなります。まず，ご指定の住所に郵便払込用紙をお送りし，入金確認後に日本語版を発送致します。

## 寄稿

### 長野県環境保全研究所植物標本庫 (NAC) のご案内

長野県環境保全研究所 飯綱庁舎 横井 力

#### 設立経緯

長野県環境保全研究所植物標本庫は，当研究所の前身である長野県自然保護研究所が発足した1996年度に設立されました。主に，藤原陸夫コレクション約11万点，峯村まさコレクション約3万点がもとなっており，2001年度にはIndex Herbariorumに国際略号NACとして登録されました。



さく葉標本のキャビネット(左)，ミズゴケ類標本のキャビネット(右)

#### 標本庫の概要

2013年11月までに，維管束植物のさく葉標本を約16万5千点，約4,550種（亜種，変種含む）を収蔵しています。長野県内では，信州大学の約30万点に次ぐ標本点数となります。産地は日本全域，特に東日本が多いです。収蔵種数が多い分類群として，オシダ属47種，ヤナギ属38種，カエデ属27種，サクラ属34種，アザミ属44種，ササ類28種，スゲ属213種があります。また，松田行雄氏から寄贈していただいた約1万5千点，42種2亜種のミズゴケ類標本を収蔵しています。その産地は日本全国，特に長野県産が多く，北欧，ネパール，インドネシアなどの国外産も含まれます。タイプ標本はシダ植物，スゲ属を中心として13点が収蔵されています。

標本情報はほぼすべてデータベース化されており，平成26年度からS-NetとGBIFを利用し，データの公開を順次していく予定です。

#### 当標本庫の利用について

当研究所飯綱庁舎では，平日の午前9時から午後4時まで標本庫の利用が可能です。閲覧のご希望の方は，以下の問い合わせ先までご連絡下さい。

**お問い合わせ先**

横井力 (主担当)・尾関雅章・大塚孝一  
 長野県環境保全研究所 飯綱庁舎  
 〒381-0075 長野市北郷 2054-120  
 E-mail : kanken-shizen@pref.nagano.lg.jp  
 TEL : 026-239-1031 FAX : 026-239-2929

**植物研究会・同好会紹介**

「樹形研究会」

樹形研究会代表 八田 洋章

**はじめに**

樹形研究会は筑波実験植物園に本拠を置き、西表島から北海道までおよそ 40 名が樹木のフェノロジー調査を、130 余名がメーリングリストを通して意見の交換を続けているささやかな集まりです。

私達は 20 年来、年間を通した樹木の成長を原則週 1 回、観察し記録することを続け、資料を蓄積してきました。冬芽の裂開・芽吹きに始まり越冬状態まで、樹木の 1 年間の生活を追いかけます。種毎の記録を蓄積して、自然現象解析の基礎データを広く提供しようとしています。同時に継続観察により観る眼を養い、観察することのわくわくする喜びを広く分かち合いたいと考えます。毎回、新しい発見があります。

会としての目下の具体的な目的は『樹木の生活史観察図譜』(仮)の刊行にあります。600 種! (あくまで目標)、一人一人が担当する樹種の観察をすすめてきました。この膨大な記録と共に、実生調査や分枝形態、描画など諸データが集積され、具体的な編集が進行しつつあります。



樹形研究会基地にて (南流山)

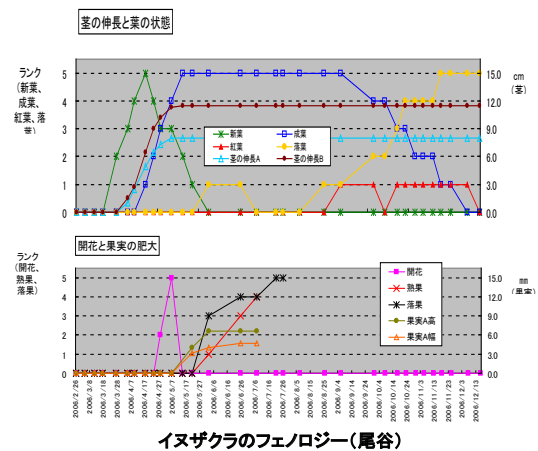
**樹形研究会の構成メンバー**

筑波実験植物園の教育普及活動の一環としての講座、トコトンセミナー「樹木の形とフェノロジー」は 1 年通して 12 ~ 15 回、毎回 30 人前後が参加され、今年は 15 年目を迎えています。3 回 4 回と参加された方々が、主たる観察メンバーを構成しています。

**調査の内容とその成果など**

(A) 生活史 (フェノロジー) 調査

樹形研究会の中心の活動です。およそ 40 人が原則として週 1 回、調査項目一覧(例



イヌザクラのフェノロジー(尾谷)

えば、①芽鱗間のずれを認めた日付、②芽鱗片の数、③葉芽の芽吹き時、など35項目に沿って観察を続けます。併せて調査日毎に、a 茎の長さを計り、b 開花、c 新葉、d 成葉などの出現頻度を記入します。これらに基づき樹木の1年間の成長の姿をグラフで示します(図)。そして観察記録から樹種毎に1年間の諸事象を生起順に1000字前後でまとめます。

#### (B) 実生観察

約300種播種し、その9割方の芽生えを得、約220種、1668枚の乾燥標本が作製されました。そのうち90種については1~3年生の標本が揃っています。毎月1回行った持田・八田による観察記録および、実体顕微鏡下で乾燥標本から読み取れたデータに基づき、①子葉の形態、③主軸が樹形形成に関与するか否か、④最初の分枝の発生位置など10数項目の諸形質が磯田氏により整理されました。目下『実生図鑑』(仮)出版のための記載と編集が進行中です。

#### (C) 分枝形態図

成木における分枝パターンで先ず注目したのは、数年で根際からシュートを更新する低木群でした。続いて高木類では5年間以上伸長した一次側枝を選んで、芽鱗痕、葉痕、托葉痕、花梗痕、枝痕などを年度ごとに確認しながら笠原氏によっておよそ150種が図示されてきました(八田著 朝日選書 599, 285頁, 同 709, 72-73頁参照)。

#### (D) メーリングリスト

情報交換のためのメーリングリスト: tree-architecture-office@googlegroups.com が運営され、会員間の意思の疎通が図られています。2004年に始まっていますから11年目を迎え、7800のやりとりがなされてきました。質問すればだれかが答えます。これも大切な活動の一つです。

私たち「樹形研究会」では以上に述べた諸データを中心に描画やたくさんの写真を加えて、『樹木の生活史観察図譜』(仮)をまとめようとしています。

これまでの植物図鑑が乾燥標本をベースに記載されてきたとしたら、我々の目指すものはかなり違った視点で樹木を見直すことになります。

なお、この仕事の当然の帰結として、熱帯雨林域の樹木たちの生活—1年に何度開花し、何度茎を伸ばすか等が大変気になります。2000~2004年に、インドネシア、ボゴール・チボダス両植物園で、約200種について、上記(A)と全く同じ方法で、合同調査を行いました。その成果は八田・Dedy編『Phenology and Growth Habits of Tropical Trees—Long-term Observations in the Bogor and Cibodas Botanic Gardens, Indonesia』National Science Museum Monographs No. 30. 436 pp. にまとめられています。これも樹形研究会の大切な成果の一つです。

なお本会は会費など一切不要です。入会を希望して頂く際には管理者に電子メールで参加申し込み下さい。「メーリングリスト参加希望」として、下記のアドレスに「住所・氏名・電話番号などと目下の関心事など」を書いてメールしてください。また、筑波実験植物園における、「トコトンセミナー」に参加して頂くとよいと思います。

問い合わせ先: tree-architecture-office@googlegroups.com (樹形研究会事務局)

入会申込, 住所変更, 退会届, 会費納入, 購読  
申込などは下記へご連絡ください。

〒305-0005 茨城県つくば市天久保 4-1-1

国立科学博物館 植物研究部

日本植物分類学会 保坂 健太郎 (会計幹事)

Phone: 029-853-8967, Fax: 029-853-8401

E-mail: khosaka@kahaku.go.jp

会 費 : 一般会員 5,000 円, 学生会員 3,000 円,

団体会員 8,000 円

郵便振替口座番号 : 00120-9-41247

加入者名 : 日本植物分類学会

\* ニュースレターに掲載された記事の著作権は日本植物分類学会が管理いたします。

平成 26 (2014) 年 2 月 20 日印刷

平成 26 (2014) 年 2 月 25 日発行

編集兼 茨城県つくば市天久保 4-1-1  
発行人 国立科学博物館 植物研究部  
海老原 淳

発行所 新潟市西区五十嵐2の町 8050  
新潟大学教育学部  
自然情報講座  
日本植物分類学会